

折々の銘 【顔回】がんくわい(その2)

・孔子が言われました「顔回は実に賢い。一碗の飯と瓢一杯の水に甘んじ、粗末な家に住み、質素な生活をしている。俗人ならば不満を零す生活でも、彼は無欲で正道を歩む楽しみを改めようとはしない」『論語』雍也第六

孔子が絶賛した愛弟子 顔回的生活態度は、時代を越えて侘茶人の心を捉えたようです。

利休の好んだ瓢花入銘「顔回」は、上記の『論語』を踏まえての銘です。

(永青文庫所蔵 <http://www.kmnh.jp/hosokawa/21.html>)

単に「瓢一杯の水」に因み瓢花入の銘としたのではなく、利休は顔回の生き方そのものに侘茶人として共感を覚えたであろうことは想像に難くありません。

瓢花入「顔回」には利休自筆の添文があります。

「顔回の花入の御礼 返す返す見届け候 御祝着と候えば 本望 本望 形見にと思ひ候えども 早く 死ねと祈られ候わん事は嫌にて候間 秘蔵ながら 今上げ申し候 かしく 尚々 能々 御礼 上げ申し候 何と祀りつけられ候や 頻に 申し候ほどに 無力此くの如くに候 かしく

十二月二十五日 易」

この手紙は花入顔回献上に対する礼状の更なる返信です。宛名が欠落しているのは残念ですが、『随流斎延紙ノ書』に「一、顔回瓢花入、肥後ノ家老ニ有よし」とありますので、利休がこの顔回を細川三斎に献上し、随流斎の時代までに一旦家老(松井豊之か)に下がったか、利休が肥後の家老に献上した後、随流斎の時代以降に細川家に渡ったか、どちらかと思われます。いずれにしても利休自身の命銘である可能性が高いことは注目に値します。(最初にもらい受けた人の命銘である可能性も若干あると思いますが)

久須美疎安の『茶話指月集』には、

「一瓢箪 名顔回 此瓢箪、むかし巡礼が腰に附けたるを、利休望して、花入となし、愛玩せらる、且翁作にも達磨あり、狂歌をその背に書つく、瓢箪の達磨なるハどうりなり あしの葉にのるかるき身なれば」とあり、桂籠や鉦鞘の花入同様、民具を見立てたものであることがわかります。

その点、最も利休らしい侘道具といえましよう。

及ばずながら、私も顔回写の瓢掛花入を愛用しています。瓢の質感が秋の草花にととてもよく合い気に入っています。

「壺中日月長」の一行を掛けるとき、私は決まってこの瓢花入を用います。

「壺中日月長」は『列仙伝』壺公が原典で、後に禅林僧に好まれた話です。

壺公とは仙人の名で、壺の中に仙界があるという話ですが、面白いことに『列仙伝』の古書の挿絵を調べたところ、壺ではなく決まって胴のくびれた瓢が描かれています。

古く中国では壺は口が細く胴の膨らんだ器の総称で、瓢箪も壺の一種と捉えられていたのです。しかも種が多く、その膨らみは子を宿す胎内にも似て、瓢箪は無尽蔵に物を生み出す不思議な壺としてしばしば民話に登場します。そういえば八仙のひとり李鉄拐[リテツカイ]も瓢箪を持っていますね。

どうやら、「壺中日月長」は瓢花入と相性がよさそうですね。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~